

## 秋の芸術祭 @ 了善寺

—幼児から大人を対象とした日本画ワークショップの実践報告—

木 下 藍

本報告は2022年10月29日に開催された「秋の芸術祭 @ 了善寺」において行った幼児から大人を対象とした日本画ワークショップの実践報告である。ワークショップには短期大学部保育科1年生の4名がボランティアとして参加した。本報告ではワークショップの様子や参加者のアンケート、ボランティア学生の振り返りからの気づきを記す。

### 1. 秋の芸術祭 @ 了善寺について

「秋の芸術祭 @ 了善寺」は藤枝市（しずおか中部連携事業）主催の「みちゆかし」という東海道界隈をフィールドに開催する体験交流プログラムの一つである。みちゆかしHPには次のように趣旨が記されている。

「東海道は東西を結ぶ、交通の要としての『道』 ここには様々な人や物だけでなく『未知』なる技術、芸術、思想が行き交う 中でも宿場は、人々が脚を留め未知なるものが交流し、混ざり合い 新たな文化が生まれる基盤となる 人が生み出す文化は留まることなく、新たな出会いを経て、さらに発展し続ける 今回は藤枝・焼津・島田をフィールドに東海道で育まれた文化を、現代風に切りとり 楽しいに『満ち』溢れた15個の体験交流プログラムを開催します。「みちゆかし」～古道で出会うおもしろきこと～東海道の奥深さに触れる体験へ」

「秋の芸術祭 @ 了善寺」は藤枝市にある了善寺を会場に、10月29日・30日の2日間にわたって開催された。日本画の絵画鑑賞（図1）・日本画体験ワークショップ・ピアノ演奏（図2）の3つの体験交流プログラムが含まれており、筆者は日本画の展示とワークショップを担当した。本報告では10月29日に行われた日本画体験ワークショップについて取り上げる。



図1 日本画展覧会の様子



図2 ピアノ演奏会の様子

## 2. ワークショップの概要と制作の様子

ワークショップの概要と実際の制作の様子について紹介する。なお、写真の使用については事前に参加者に説明の上、同意を得ている。ワークショップの概要は表1の通りである。40分程度の時間を設定しており時間が短かったことと、日本画材の体験は初めてである人が多いことが予想されたため、筆者から制作の提案をしながら進めた。

「秋の葉っぱを観察して描こう」	
日時	10月29日(土) ① 11:00～11:40、② 13:00～13:40、③ 14:00～14:40
参加者	16名(幼児2名、小学生3名、大人11名)
秋の色づいた葉をモチーフに、日本画材を用いて描くことをテーマとし、以下の手順で制作を進めた。	
①自分の描きたい落ち葉を選ぶ	
②3色の支持体(白緑・山吹・白群)から好みのものを選ぶ	
③鉛筆で下描き(写生)……葉の形、葉脈などを観察しながら描く	
④墨で線を書く(骨描き)……鉛筆で描いた線を墨でなぞる	
⑤薄墨で陰影をつける	
⑥岩絵具で葉全体にベースとなる色を塗る	
⑦葉の色を観察しながら、さらに色をのせて仕上げる	
使用画材	麻紙ボード(下地を塗り、砂子を蒔いたもの)、墨、岩絵具の具、膠、筆

表1 ワークショップの概要



図3 筆者参考作品



図4 ワークショップの使用画材

### 【制作の様子】

初めは恐る恐る下描きをする参加者が多かったが、モチーフの落ち葉をよく観察しながら写生をしていた。絵の具は岩絵具を用意した。岩絵具とは日本画で一般的に用いられる画材で、鉱物を砕いた砂状の絵の具である。そのままでは画面に定着しないため、膠という接着剤を混ぜて自分で絵の具を作る。自分で絵の具を作る工程に驚く参加者もいたが、岩絵具に実際に触れることで素材の性質の理解や興味・関心に繋がったようだった。

初めて用いる画材に興味を持つ参加者が多く、鉾物の種類や既存の日本画作品に関する質問等も出た。ボランティア学生は事前学習での体験から答えられる質問については答えたり、参加者の制作に肯定的に関わったりしていた。

そして、どの参加者も、筆者の提案を自分なりに解釈し、それぞれの表現を楽しむ姿が印象的であった。例えば図5の幼児は筆者の用意した落ち葉だけでなく、自分で見つけたお寺の石を描いたり、文字を書いたりしていた。

制作終了後には、ボランティア学生と幼児、小学生の参加者とお寺の庭で遊ぶ姿も見られた。



図5 制作の様子（年長児）

### 【お互いに影響し合う姿】

ワークショップには親子で参加した組が3組いた。同じテーブルで制作しながら「○○の葉っぱは顔に見えるね」「お母さん上手だね」とお互いを認めあいながら制作する様子が見られた。親子でお互いに影響し合う姿について二つ紹介する。

図6は、祖父と孫（年長児）の作品である。祖父は絵を習っていたことがあり日本画材を使った経験もあるそうで、葉や木の実の影を薄墨で描いていた。孫（年長児）ははじめすぐに「できた」と言っていたが、祖父の描く様子を見て「おじいちゃんみたいに影を付けたい」と言い、ドングリや落ち葉をよく観察しながら、集中して薄い墨で影を付けた。



図6 陰影をつけた作品（左から祖父、孫）

また、図7は親子で参加した大人の参加者の作品である。筆者は葉を1枚か2枚、画面中央に描くことを提案したが、二人とも全面に葉をバランスよく配置して描いている。二人は葉の配置を決める際、「こっちの方がさみしいから描いた方が良いんじゃない?」「ここは線描はしなくても良さそう。」とお互いの絵にアドバイスをしながら描いていた。



図7 葉を全面にバランスよく配置した親子の作品

以上のように、時には一人一人集中して静かに、時にはお互いにアドバイスをしあいながら和気あいあいと、和やかな雰囲気の中でワークショップが行われた。

### 3. アンケートからの考察

ワークショップ終了後、アンケート調査を行った。項目は表2の通りである。アンケートを実施する際には、事前に趣旨を説明した上で回答内容について掲載することの同意を得た。アンケートは任意、無記名で回答とした。16名の参加者のうち、12名から回答を得た。

1. これまでに日本画材を使用したことはありますか？

使用したことがある

→いつ、どのような場面で（ ）

例：中学校の美術の授業で、社会人になってから習った 等

使用したことはない

2. 本日のワークショップで、日本画材を使用して制作した感想について教えてください。

(面白かったこと、難しかったこと、疑問など何でも構いません。自由記述)

表2 アンケートの項目

#### 3-1. 日本画材の楽しさや魅力

12名の回答者のうち、日本画材を使用したことがあると回答した人は1名、使用したことがないと回答した人は11名であり、ほとんどの参加者が日本画材を使うのが初めてであった。そのため、日本画材を使用した感想については「初めて使ったので新鮮で面白かったです。」と言った記述が多かった。

普段使っている水彩絵の具等との違いについて「いつもつかう絵の具とちがってたのしかった。」「普通の絵の具と違って、色合いがどくどくでせんさいで使っていて楽しかったです。」といった感想もあった。その特性に気付き「色が重なる所が楽しかった。」「日本画の特性を生かした描き方があるので、もう少し分かった上でまた描いてみたいと思いました」「色をまぜるのではなく、ぬり重ねていくということが、面白い。先にどうしたいのかということ想像してかくことが、面白さだと思う。」

また、岩絵の具では絵の具を作るところから行うため、「色の作り方がおもしろくてとても楽しかったです。」「感触がとても良かったです。」「筆の感触が気持ち良く次々にかきたくなった。」と絵の具の作り方や感触を好意的に捉える声もあった。絵を描く際は視覚的な興味に重きが置かれがちであるが、感触に気付くことができるのも日本画材の魅力であると言えよう。「少しでもやってみると今後鑑賞する時に、親しみを持ってみるができるように思います」といった感想もあり、ワークショップの制作で終わりではなく、今後鑑賞体験にも活かせる可能性が考えられる。

その他、学生ボランティアに対する好意的な感想も多く寄せられた。「学生さんととても雰囲気心地良かったです。」「教えてくださる方々のていねいさがとてもよく楽しくかくことができました。」といった内容があった。保育科学生の人と丁寧に関わる姿が、ワークショップの場の心地よさや制作の楽しさに繋がったようである。

### 3-2. 日本画材の難しさ

日本画材を使用しての難しさについては、普段使う絵の具との違いかくるものが多かった。特に色味についての難しさを感じた参加者が多く、「絵の具とちがって思うように色が塗れないのが難しかった。」「楽しいけど大変だ、色味の調節が難しい。」といった感想があった。

また、「水分量の調節が難しかったです。立体感をいかに出すか←そもそも出さない?」という感想もあった。岩絵の具では西洋絵画的な陰影による立体感を出すのは難しいため、このような感想が出たと考えられる。

しかしながら、先述の「日本画の特性を生かした描き方があるので、もう少し分かった上でまた描いてみたいなと思いました」という感想があったように、ワークショップ中も「またやりたい」という声が多く聞かれた。今回は初めてのワークショップだったため、今後複数回開催する、一度体験した人がまた制作できる場を設ける等できると、日本画材の特性が難しさから楽しさに変化するかもしれない。

### 4. 学生ボランティアの感想からの考察

学生にはボランティア後感想を記入してもらった。また、ドキュメンテーションをそれぞれが作成した(図8)。感想の文章から、学生の学びについて筆者の気づきを述べる。



図8 ボランティア学生の作成したドキュメンテーション

#### 4-1. 岩絵の具という素材の魅力について

学生には事前学習として日本画材の使い方の説明を行い、実際に参加者と同じ画材を用いてワークショップ内容を体験してもらった。その上で、ワークショップで参加者の制作補助を行ったことで、日本画材の素材の魅力に気付く記述があった。

「日本画の今日使った岩絵具は、小学校や中学校の時に使っていた絵の具とは違って、チューブから出せばすぐ使えない所に魅力があったと思った。普段絵の具を使っていた時に、これはなんでできているんだろうと考えたこともなかったが、今日はほとんどの人がこの絵の具は一体なんなのかのいうところに強い興味を示していたと思う。初めて見たものだったからというのもあったと思うが、実際に自分

の指で触って絵の具を自分で使えるようにするため、おもしろい、楽しいという感情が興味をより強めると思った。」

「日本画を体験した方たちはみんな口を揃えて「もっとやりたいね。」「時間もっと欲しい!」とおっしゃっていました。」

#### 4-2. 子どもとの関わりを通しての学び

本実践は10月29日に行われた。2週間後には第I期教育実習を控えており、実習の前に子どもと関わる機会を持てたことはプラスになるだろう。

「一つの葉を描くためによく葉を観察して描いていたが、子どもの方がおとなと比べると自由に、現実に囚われることなく描いていると思った。私は年長さんの男の子がどんぐりを塗る時に、茶色っぽい色を男の子の前に並べたが、男の子はそこに並べなかったピンクを選んでいて。保育をする時にもどんぐりの色はこれと決めきらないことが大事なのではないかと身をもって感じる事ができたので、とても貴重な経験になったと思う。」

「後半の子どもたちがきたときには、分かりやすい言葉で、きれいな言葉で説明することを心がけました。集中力を持たせるために、お母さん方がアドバイスする様子から、私も、幼稚園などの制作の時に具体的な指摘をすることが大事だと思いました。」

「年齢が低いほど迷いがなく、すぐ「できた!」と自信満々に教えてくれる姿はとても可愛らしかったです。」

「絵を描くことで、集中する楽しさを味わっているのだということ客観的に見る事ができました。保育現場でも、子どもたちに集中して一つの事を行う楽しさを伝えていきたいと思いました。」

「やり方を説明する時に、頭ではわかっているけど、声にして説明するのはとても難しいと思った。実習する前に子どもと関わる事ができて、説明する難しさを知ることができたので、実習の時に今日の体験を生かしたいと思った。」

#### 4-3. 大人との関わりを通しての学び

保育者を目指す学生たちは普段から子どもとの関わりは意識していても、大人との関わりを意識することや機会は少なく、貴重な経験だったようだ。そして、今回のワークショップを通して、大人との関わりから気付いたことも多いことが記述からうかがえる。

「子どもと関わる機会が増えている中で、大人との関わりは貴重で、専門的なアドバイスはうまくできなかったかもしれませんが、『丁寧な説明ありがとう』と言われ、私なりに寄り添った援助ができたと思います。」

「作業をしている方に、どこまで声をかけて援助していいのかわからず、難しかったけれど、相手が必要とする時に、すぐ対応できる距離にいたことが、良い支援だったと思いました。」

「日本画を通して、大人と子どもとコミュニケーションを取ることができたのでよかった。普段同級生としか関わることがないので、今回のボランティアで普段話することができない人たちと関わることができ、接し方などを知ることができた。一人一人の表現の仕方は違うので、絵を描いている人たちの姿を見てとても面白いと感じた。」

## 5. まとめと今後の展望

本ワークショップでは、短い時間ではあるが参加者と学生ボランティアが日本画材を介して交流する温かい場作りができた。日本画材を使うのが初めての参加者がほとんどだったが、筆者の提案を自分なりに解釈して表現したり、参加者同士で影響し合ったりする場面が多く見られた。「またやってみたい」という声も聞かれたため、今後も日本画材のワークショップを行っていきたい。

そして、本ワークショップが穏やかな雰囲気の中で行えたのは学生ボランティアの力によるものが大きいと筆者は感じる。保育科学生の人と丁寧に関わる姿が、ワークショップの場の心地よさや制作の楽しさに繋がったと考える。これまで保育科生のボランティアと言えば子どもを対象としたものを想像していた。しかし、今回子どもだけでなく大人とも関わることによって学生の学びがあるのだと筆者自身が気づかされた。今後も造形表現を通して地域との交流を続けていきたい。

## 6. 参考文献

みちゆかし HP <https://shizuoka-onpaku.jp/fujieda-michiyukashi/about> (2022.12.1 閲覧)